作品の中に入り込む

土田英生

イトウワカナさん『砂利はポルカで踊る』。告げられる停留所の名前からその土地の匂いも感じられ、ある種のロードムービーを観ているようだった。ただ、それぞれが不自然なく自らを語るには仕掛けが弱い。もう少し丁寧な取り廻しが必要だった気がする。また、サチコの空白期間の謎がラスト近くになって見えてくるのだが、それが期待したよりも小さく感じられ、やや肩透かしで終わったのが残念だった。

久野那美さん『行き止まりの遁走曲（フーガ）』。メタファーを纏った登場人物たちに妙な懐かしさを覚えた。登場人物それぞれが自らにとっての実体を求めている設定だが、特に「招待男」のホンモノとニセモノを巡る会話には深く共感した。私も常に自分は偽物なのではないかという不安を抱えているが、そもそも本物という概念自体を壊されて視界が開けた。穴が存在するのかどうか、ここが本当の港であるのかどうか、様々なモチーフに惹かれたけれど、全体として力強さに欠けた。

くるみざわしんさん『白地に赤く、日の丸とカッポウ着』。日中戦争から太平洋戦争に進んでいく当時の社会を、国防婦人会と愛国婦人会という視点から描くという設定が秀逸だと思った。最初は読みながら、国防婦人会と愛国婦人会、男性と女性、東京と大阪……こうした対立を透かし絵にして戦争という対立を描く作品なのだと考えたが、ラストまで読むとどうやらそうではなく、市井の人たちの考えのない善意が戦争への歩みを後押ししてしまうという物語で、現在の私たちへの訴えなのだと感じた。だとするならば最初から、国防婦人会の橋本ふみ一人の心情にもっと焦点を絞った方が良かったように思う。

高橋恵さん『ダライコ挽歌』。バブル崩壊直前から10年間ほどの町工場が定点観測のように描かれる。懸命に生きる魅力的な人々の群像劇。この町工場の社長だった男性の死から始まる物語はまさに挽歌だ。後半になって明らかに粗くなってしまうのが残念。人の出し入れが雑になってしまっている印象だった。

田辺剛さん『クローゼットQ』。これは着想が猛烈に面白い。興奮して読んだが、話の重心がどこにあるのか掴めなかった。ひきこもりだったユウキが連れて行かれた先での体験によって変化する話なのか、床下と床上との関係が軸なのか。また、床下世界の成立のさせ方が難しい。こうした話の場合、いかにその世界を納得させられるかが勝負だと思う。

山村菜月さん『その桃は血の味がする』。会話や言葉の選び方にセンスがある。作者に見えている世界を実直に描いている印象でとても好感を持った。姉妹個々は描けているが、愛美の分がやや悪く、読んでいて円花に肩入れしてしまう。両方の立場が拮抗すればするほど、魅力を増すのではないかと思った。また、氷川という人物が掴めずに終わった。

山本彩さん『花を摘む人』。一場のやりとりだけですっかり心を奪われた。二人は心の中に深い闇を抱えているのだが、そのことに触れながらも終始ほのぼのとした会話を展開させ見事な短編になっている。それぞれの話の振り幅が広いことにも驚いた。二場は一転して私たちが見慣れた風景から地域の軋みを浮かび上がらせ、三場でのダムに沈む直前の切ない恋模様で過去を描く。ラストで一場の先を見せて作品は終わる。台詞がどれも説明的にはなっておらず、短いやり取りで個人と背景を確実に把握させる力には脱帽した。

選考のために候補作を読んでいた時期に私自身も作品を書いていた。山本さんが「その景色を見て来たように」書いていることに羨望を覚えた。作品は虚構であり作者が考えて書いたものには違いないけれど、作為が見えた瞬間に他者は冷めてしまう。作られた世界に引き込み続けるには、作者自身がその作品の中に偽りなく入り込むことが必要だ。その点で『花を摘む人』は群を抜いていたと思う。

山本彩さん、山村菜月さん、おめでとうございました！